

みなさんはジェンダーギャップ指数というのをご存知でしょうか。簡単に言えば、国の男女格差の指標なのですが、日本は156か国中120位(2021年度)で、先進国の中で最低ランクです。日本に住んでいるとあまり気づかないかもしれませんが、日本は世界の中で男女格差が非常に大きい国だということは知っておいてよいでしょう。

## 当たり前だと思いませんか？

たとえば、父親が仕事に行き、母親が家で家事や育児をするという家族の姿は、よくある当たり前のことに思われるかもしれませんが、しかし、生物学的には女性の方が家事に向いているということはないので、こうした家族像は日本社会におけるステレオタイプだと言えるでしょう。欧米でも、女性は家庭を守るものという偏見がなかったわけではありませんが、最近はその反省が進んでいます。

国際会議などでも、日本の代表団が男性ばかりなのに対して、参加各国の代表団は男女同数だったりします。このギャップが、ほぼ男女格差に意識的な国々と日本の差だと思ってよいでしょう。実際、ジェンダーギャップ指数を構成する要素の中で、日本が特に後れを取っているのが、政治家や管理職に占める女性の割合なのです。



## なぜわざわざ「女〇〇」と言うのか

たとえば、女性が会社を起業したりすると、「女社長」と言われてもてはやされたりします。しかし、社長が男性だと、わざわざ「男社長」とは言われません。単に「社長」と言われることがほとんどです。

ここには、「社長と言えば男性である」という暗黙の前提が垣間見えます。女性の社会進出を奨励するのは大切です。しかし、わざわざ「女〇〇」と言いたくなる時に、自分は女性がそれをやることをふつうのことだと思っていないのだ、という自覚は持っていたいものです。「リケジョ」という言葉も同様の問題をはらんでいます。いわゆる理系学問を学ぶ女性が増えるのは喜ばしいことです。しかし、「リケジョ」と言うってしまうのは、女性が理系に進むことを当たり前とはみなしていないことの表明でもあるのです。

